



ガビン先生と

楽しく

学ぼう

日本の

古典文学

第一巻

1

① 令和元年十一月二十九日(金)

「元号『令和』記念 初めての万葉集講座」

○令和二年 五月二十二日(金) ←

「日本の四季と古典文学 春の章」 ※感染症のため中止

② 令和二年 七月 三日(金)

「日本の四季と古典文学 夏の章」 花を中心に読む

③ 令和二年十一月 十三日(金)

「日本の四季と古典文学 秋の章」 花を中心に読む

④ 令和三年 二月 五日(金)

「日本の四季と古典文学 冬の章」 花を中心に読む

⑤ 令和三年 五月二十八日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」 昔の食生活その一

⑥ 令和三年 六月二十五日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」 昔の食生活その二

⑦ 令和三年 月二十五日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」 ?

⑧ 令和三年 月二十五日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」 ?

令和元年十一月二十九日（金）茂原市総合市民センター

茂原市社会福祉協議会事業

新元号「令和」記念 初めての万葉集講座

その 1



◎ 新元号『令和』の意味とは？

☆ 当時の安倍首相の談話より

人々が美しく

心を寄せ合う中で

文化が生まれ育つ

春の訪れを告げ、

見事に咲き誇る梅の花のように

一人ひとりが

明日への希望とともに、

それぞれの花を

大きく咲かせることができる。

そうした日本でありたい

と願いを込め、決定した。

天平2年(730年)正月13日

正月の祝宴の華やかさ

福岡県太宰府の長官(大伴旅人)宅で梅花の宴

外交の入口の役目+海外との文化交流の窓口
梅||中国から渡来した流行の最先端の花

漢詩の文化 花と言えば「梅」

貴族の教養+政治とのつながり

宴会ではあるがドンチャン騒ぎは無い

藤原氏の陰謀により、左遷 「長屋王の変」

「あのころは たのしかったなあ…」

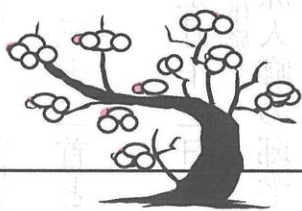
我が園に 梅の花散る

ひさかたの

あめ 天より雪の

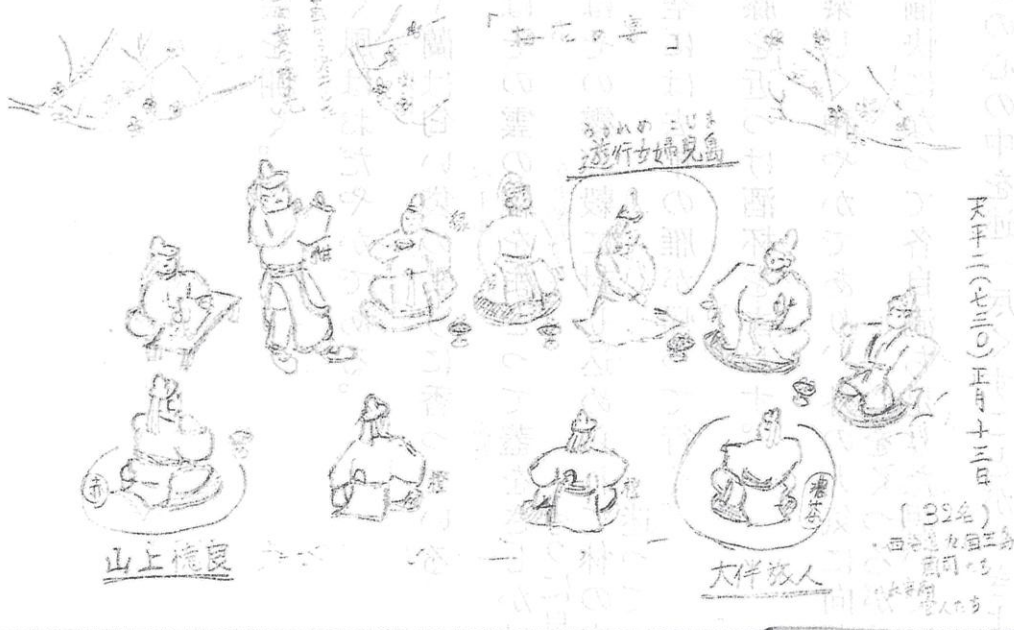
流れ来るかも

大伴旅人



「なかなか 人とあらずは 酒壺に なりにてしかも 酒に染みなむ」

なまじつか人として生きていないで 一生涯 酒に漬かっていたものだ
大伴旅人



天平二(七三〇)正月十三日

(32名)
西宮司
大伴旅人

梅花歌卅二首并序

(序文) 中国の詩序をまねる ↑ 「蘭亭集序」 王羲之 おうぎし

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅申宴会也

于時初春令月氣淑風和

梅披鏡前之粉蘭薰珮後之香

加以曙嶺移雲松掛羅而傾盖

夕岫結霧鳥封穀而迷林

庭舞新蝶空歸故鴈

於是盖天坐地促膝飛觴

忘言一堂之裏開衿煙霞之外

淡然自放快然自足

若非翰苑何以攄情

請紀落梅之篇古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

梅花の歌、三十二首と序

天平二年正月十三日、

太宰の帥旅人卿大伴旅人の邸宅に集まって宴会を開く。

折しも初春の正月の佳よい月で気は良く風はおだやかである。

梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は匂い袋のように香っている。

そればかりではない、
夜明けの峰には雲がさしかかり、松はその雲の羅ベールをまとして蓋ふたをさしかけた

夕方の山の頂いただきには霧がかかって、鳥はその霧の穀うすぎぬに封じ込められて林の中に迷っている。

庭には今年生まれた蝶が舞っており空には去年の雁が帰って行く。

そこで天を屋根に地を席むしろにし互いに膝を近づけ酒杯をまわす。

一室の内では言う言葉も忘れるほど楽しく和やかであり、外心の大きに向かつて

さっぱりとして各自気楽に振る舞い愉快になって各自満ち足りた思いでいる。

もし文筆によらないでは、どうしてこの心の中を述べ尽くすことができようか。

諸君よ、落梅の詩歌を所望したいが昔も今も風流を愛することには変わりが

ここに庭の梅を題として、まずは短歌を作りたまえ。

ないのだ。

「梅花歌 卅二首并序」

天平二年正月十三日、
 萃于帥老之宅、申宴會也。
 于時、初春令月、氣淑風和。
 梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。
 加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾盖、
 夕岫結霧、鳥封穀而迷林。
 庭舞新蝶、空歸故鴈。
 於是、盖天坐地、促膝飛觴。
 忘言一堂之裏、開衿煙霞之外。
 淡然自放、快然自足。
 若非翰苑、何以據情。
 請紀落梅之篇、古今夫何異矣。
 宜賦園梅、聊成短詠。

梅花の歌、三十二首 并せて序

天平二年正月十三日に

帥老の宅に萃りて、宴會を申べたり。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ。

梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薰らす。

曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて、盖を傾け、

夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。

庭に新蝶舞ひ、空には故鴈歸る。

ここに天を蓋にし地を坐にし膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に聞く。

淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。

もし翰苑にあらざは、何を以てか情を據べむ。

請はくは落梅の篇を紀せ、古と今と夫れ何か異

園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

みんな楽しんで

大式(大宰府首席次官)

[816] 小野 少式(大宰府首席次官)

梅が散る

[817] 栗田 人? (大宰府首席次官)

梅の花が咲いてる

[818] 山上 懐良(筑前守 大夫)

春の朝を

[819] 大伴 首座(筑後守 大夫)

悪の告げ

[820] 葛井 大成 (筑後守 大夫)

梅が満開

[821] 満誓 沙弥 (空 → 出家)

栗く飲む

正月十日(現 2月初旬)

ひさのたの

五月

高田阿茶都知能 等母尔比佐斯父 伊比都夏等
詩能久斯美多麻 志可志家良斯母
右等傳言 那珂郡伊知御 菟嶋人
建部牛麿是也

天竺の果より

この奇魂敷り

在り多傳言は那珂郡の伊知の
御 菟嶋の人 建部牛麿なり

梅花河世二首并序

天年二年正月十日 萃于師老之宅

中宴會也 于時 初春令月

氣淑風和 梅根 鏡前之粉 蘭蕙

嗣後之香 加以 曙嶺 移雲 松掛

羅而傾 蓋夕 油信 霧鳥 封 穀
而迷林 庭舞 新蝶 空歸 故鴈
於是 蓋天坐地 促膝 飛觴 文鴈

梅の花が散る
雪の上に流れて

(王権者) 大伴 旅人 [822]

ひさのたの

(金) 文京市総合市月サレマ

懇業並大司土校業の式の中

うめのはなちる

わか

あめよりゆきの
ななはなちる

会品

茂原市社会福祉協議会事業

ガビン先生と楽しく学ぼう

「日本の四季と古典文学」

花を中心に読む

その 2



令和二年五月二十二日（金）茂原市総合市民センター

「春の章」

感染症拡大防止対策のため 中止

令和二年七月三日（金）茂原市総合市民センター

「夏の章」

むかしおとこありけり

そのおとこ身をえうなきものに思ひなして京にはあらじ

あつまの方にすむべきくに求めにとて行きけり

もとより友とする人ひとりふたりしていきけり

みちしれる人もなくてまどひいきけり

みかはのくにやつはしといふ所にいたりぬ

そこをやつはしといひけるは水ゆく河のくもてなれば

はしをやつわたせるによりてなむやつはしといひける

そのさはほとりの木のかけにおりゐてかれいひくひけり

そのさばにかきつはたいとおもしろくさきたり

それをみてあるひとのいはく

かきつはたといふいつもしをくのかみにすゑて

たひのこころをよめ

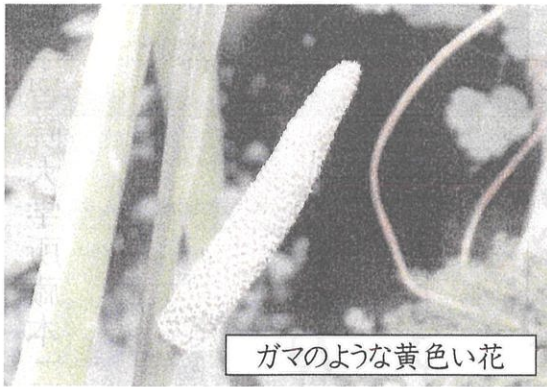
といひければよめる

昔、男がいました。

その男は我が身を必要のない者と思ひ込んで京には
おるまい。東の方で住むのに適した国を探すためと思ひ出か
けました。以前から友人としている人、一人二人と一緒に出か
けました。一行には東国の道を知っている人はいなく、迷いな
がら行つたのでした。ほどなくして三河の国の八橋という所に行き着きま
した。そこ八橋と言つたのは水が流れる河が八方に分岐し
ているので橋を八つ渡してあることに基づいて八橋と言つたの
でした。一行はその沢のほとりに木の陰に下りて座り乾飯を
食べました。その沢には、かきつばたがたいそうすばらしく咲い
ていました。それを見て一行の中のある人が言うことには

『かきつばた』という五文字を和歌の各句に置いて
旅の気持ち詠みなさい

と言つたので詠む。



ガマのような黄色い花

しよづぶ Ⅱ あやめぎき
 菖蒲湯
 葉を湯に入れる
 無病息災
 万葉集 卷十 1965
 「ほろぎす
 いとふ時なし
 あやめ草
 かつらにせむ日
 こゆ鳴きわたれ」

いづれ あやめか かきつばた (美人をたとえる表現) 「太平記」



『あやめ』
 5月上、中
 葉の主脈不明
 30cm、60cm
 乾いた所
 花は紫(まれに白)
 「文目」
 花の元に網目模様



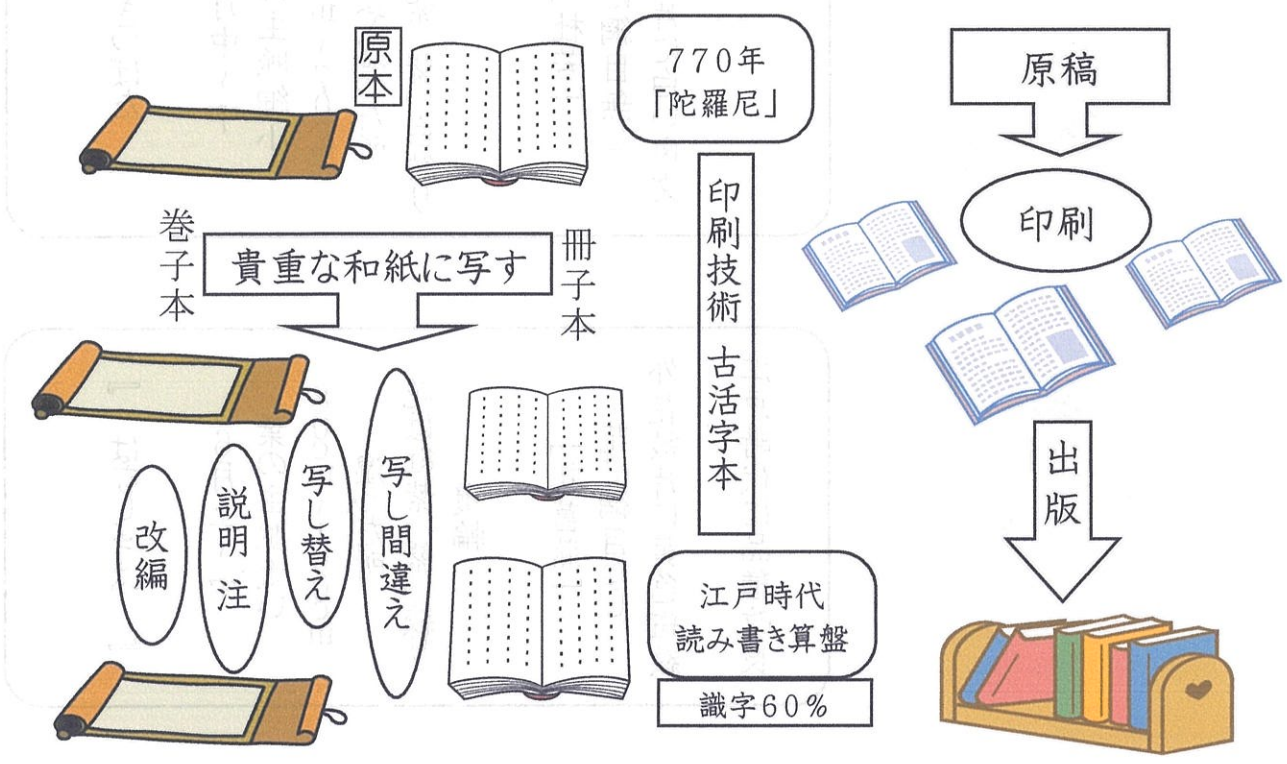
『かきつばた』
 5月中、下
 葉の主脈細小
 50cm、70cm
 水中や湿った所
 花は青紫、紫、白絞り
 「杜若」
 花に網目無し
 外花被片に白い斑文



『はなしよづぶ』
 6月上、中
 葉の主脈太い
 80cm、100cm
 湿った所
 花は紅紫、紫、絞り
 覆輪
 「花菖蒲」
 花に網目なし
 外花被片に黄色斑紋
 江戸時代に品種改良

世勢物語九 (二) 原本

うのまほかまづもる伊とおもしあく
 ほきももちれをば見てある人のいそぐ
 いきつまたとふ、流きーをふのみよ
 すへてすひの心をまたらひむれはるる
 から衣まづまねな、しほりーあれい
 まろくきぬるをむをうう思
 とよめあねんみる人かれいのひの
 へよなみんむらしてあひまき



あじさい (紫陽花)

狭義のアジサイ(ホンアジサイ)は、日本で原種ガクアジサイから改良した園芸品種で、ガクアジサイに近い落葉低木。6月から7月にかけて開花し、白、青、紫、または赤色の萼(がく)が大きく発達した装飾花をもつ。ガクアジサイではこれが花序の周辺部を縁取るように並び、園芸では「額咲き」と呼ばれる。ガクアジサイから変化した、花序が球形ですべて装飾花となったアジサイは、「手まり咲き」と呼ばれる。

アジサイの語源ははっきりしないが、

最古の和歌集『万葉集』では「味狭藍」「安治佐為」、平安時代の辞典『和名類聚抄』では「阿豆佐為」の字をあてて書かれている。

もつとも有力とされているのは、「藍色が集まったもの」を意味する「あじさい(集真藍)」がなまったものとする説である。

「集まって咲くもの」とする山本章夫の説(『万葉古今動植物正名』)、「厚咲き」が転じたものであるという貝原益軒の説がある。

花の色がよく変わることから、「七変化」「八仙花」とも呼ばれる。

日本語で漢字表記に用いられる「紫陽花」は、唐人白居易が別の花、おそらくライラックに付けた名で、平安時代の学者源順がこの漢字をあてたことから誤って広まったといわれている。草冠の下に「便」を置いた字が「新撰字鏡」にはみられ、「安知佐井」のほか「止毛久佐」の字があてられている。

和歌

万葉集には二首のみ。

「言問はぬ 木すら味狭藍

諸弟(もろと)らが 練の村戸(むらと)にあざむかえけり (大伴家持 巻四 773)

「紫陽花の 八重咲く如

やつ代にを いませわが背子 見つつ思はむ(しのはむ) (橘諸兄 巻二十 4448)

平安後期になるとしばしば詠まれるようになった。

「あぢさゐの 花のよひらに もる月を

影もさながら 折る身ともがな (源俊頼 『散木奇歌集』)

「夏もなほ 心はつきぬ あぢさゐの

よひらの露に月もすみけり (藤原俊成 『千五百番歌合』)

「あぢさゐの 下葉にすたく 螢をば 四ひらの数の 添ふかとぞ見る (藤原定家)

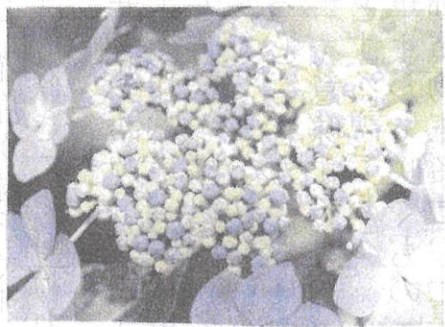
俳句

俳句では、あじさい(紫陽花)は夏の季語。

現代では多くの作品が詠まれている。

あじこが紙手にもあじこが。て行くまうに。あじりやく
 のつまでもおだやもぞいく下さ。わたしはこを花を見るたに
 あじこを思ひがしすし。橋諸兄 卷三十 4448

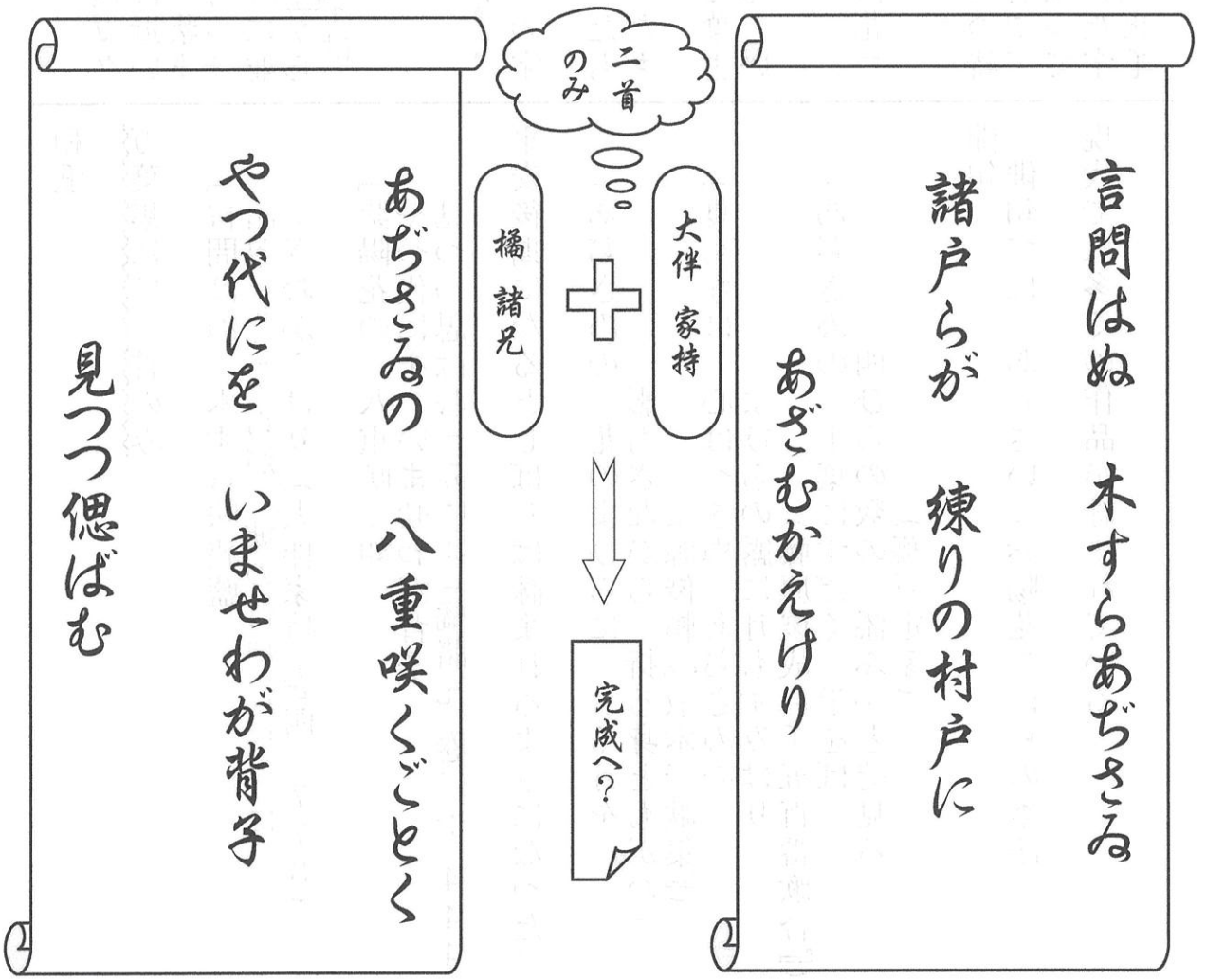
あぢさゐの 八重咲くごとく
 八つ代にを いませわが背子
 見つつ思はむ



言問はぬ 木すらあぢさゐ
 諸着らが 練りのむらとに
 詐えけり
 大伴家持 卷四 7793

二つで言葉を完成へ
 (藤原代の正政にちかする)

その後、まじく取りあひし
 (中世の歌謡と詩文) 3首
 世々の句に やつを見入る
 柳きりし 藤原の歌し
 出て さい



「秋の章」

令和二年十一月十三日（金）茂原市総合市民センター

▼新元号「令和」記念

はじめての万葉集講座

11月29日（金）10時～11時 / 内容＝令和の出典として話題になった万葉集。万葉の世界に触れてみませんか？ / 対象＝市内在住・在勤者 / 定員＝50人（申込順） / 講師＝青少年指導センター 伊藤雅敏所長 / 申込＝10月28日（日）9時～電話にて。

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！

日本の四季と古典文学～春の章～

5月22日（金）10時～11時 / 講師＝伊藤雅敏先生 / 対象＝一般 / 定員＝50人（申込順） / 申込＝4月15日（日）9時～電話にて

総合市民センター

☎(24)9511 ㊟(23)7444

（※原則として祝日および年末年始）

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！

日本の四季と古典文学～夏の章～

7月3日（金）10時～11時 / 講師＝伊藤雅敏先生 / 定員＝50人（申込順） / 申込＝5月22日（金）～電話にて（9時～17時）※土日可 / 秋・冬の章と続きます

総合市民センター

☎(24)9511 ㊟(23)7444

（※原則として祝日および年末年始）

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！日本の四季と古典文学～秋の章・冬の章～

11月13日（金）（秋の章）、12月11日（金）（冬の章）10時～11時30分 / 講師＝伊藤雅敏先生 / 定員＝25人（申込順） / 申込＝9月17日（日）9時～電話にて

広報「もばら」の募集欄

春 59%

秋 41%

- ・寒く冷たい冬が終わり暖かくなる
- ・生命の息吹、躍動を感じる
- ・明るい時間帯が長くなる
- ・身も心も明るくなるように感じる
- ・花見が好き

- ・暑い夏が終わり涼しくなる
- ・おいしいものが増える
- ・心がしっとり落ち着く
- ・紅葉が好き
- ・旅行、野外活動に最適

紅葉した葉を手に取り愛でることが出来る秋こそが…
鳥が鳴き、花が咲く春も良いけれど

- 花見
- 旅行
- ウォーキング
- 園芸、畑仕事
- ピクニック
- 山歩き・登山
- スポーツ
- 山菜、フルーツ狩り

- タケノコ
- イチゴ
- 春キャベツ
- 新ジャガイモ
- 山菜
- アスパラガス
- タマネギ
- そら豆

- ナシ
- 柿
- 栗
- ブドウ
- キノコ
- リンゴ
- サツマイモ
- 秋ナス

- 旅行
- 紅葉狩り
- 読書
- 温泉めぐり
- ウォーキング
- 月見
- 食べ歩き
- 山歩き、登山

冬木成 春去来有 冬より春去り来れば
不喧有之 鳥毛来鳴奴 喧かぶりし 鳥も来鳴きぬ
不開有之 花毛家礼坪 開かざりし 花も咲けれど
山平茂 入而毛不取 山を茂み 入りも取らず
草深 執手母不見 草深み 執り手も見ず
秋山乃 木葉平見何着 秋山の 木の葉も見ては
黄葉平港 取而曾思初布 紅葉を 取りて思ふ
青乎昔 置而曾歎久 青き昔は 置きて歎く
曾許之恨之 秋山吾れは ぞと恨めり 秋山吾れは
冬か過ぎて春が来ると 鳴いていなかつた鳥もまよふり
咲かなかつた花も咲く
けれど山には木が生い茂り入って採ることもできない
草が深くて 手にとりて見ることもできない
秋山は木の葉を見たら、
もみちを手にとりていかにと心える
また手をとって落ちてしまふものを置いてため息をつく
残念だけれど秋はそんな秋山がすばらしいのを私を愛びます
天竺草の山菜と豚草の山菜 万葉集巻16 額田の皇



ヨモギ (キク科)



ツユクサ (ツユクサ科)



ノジグク (キク科)



リウノウギク (キク科)

百代草

果るの節か

お父さん お母さん 屋敷の後ろに生えた
百代草のように百代まで長生きして下さ
私が帰るまで

父母が 殿の後方しりへ
百代草 百代いでませ
わが来たるまで

万葉集

父母が 殿の後方しりへ
百代草 百代いでませ
わが来たるまで

卷二十 4326
生壬部足国(みぶべのたりくに); 静岡県掛川市の防人

ノギク、ヨモギ、ツユクサ、マツ???
リユウノウギク? 樟腦の香り 万年青(オモト)?

その年の山野花の中で最後に咲く花であることも父母の長寿を祈る草としてふさわしい

古代、わが国に野生の小さな菊があり、「百代草」とよばれていた。それが中国に渡り、長い年月をかけて今日のように大輪の菊に改良され、平安時代に我が国に里帰りした。懐風藻に歌われた「菊」は野生の菊ではなく、「家菊」であり、万葉人は中国で描かれた絵画や漢詩から学び、実物はまだ知らなかったのではなからうか?

ひさかたの

雲の上にて

見る菊は

天つ星とぞ

あやまたれける

古今和歌集 卷五 秋 下 二六九

ひさかたの雲の上にてみる菊は
天つ星とぞあやまたれける

藤原敏行

宮中の殿上から見る菊は星と見間違ふほど美しい

当時としては、菊は珍しい。

身分の高い人しか見る機会が無かたのだろう。

普段、見ることのない菊の花の美しさを詠んでいる。

「やっど宮中にあがれたのぞ、宮中を賛美

和歌を詠み媚びへまついな」

十一月に「古典菊展」実施
国立歴史民俗博物館 ぐらしの植物苑

古典菊は江戸時代に入ってから
肥後菊、伊勢菊、松坂菊、奥州菊、江戸菊、



ではない

鶉衣 横井也

元禄15 1702
1783 天明3

非文集

一年松木 淡々己れ高ぶり 人を慢ると伝へ聞え

初めて対面して化物の正体見たり 枯尾花

其の感なること大概この類なり

化物の正体見たり 枯尾花

幽霊の正体見たり 枯尾花

疑心暗鬼に陥た心境下では、同じなびく枯れ尾花のような
何でもないものも怪しげに思え幽霊のようならたはらない
ものと思えさうまう見違えさうまう

与謝蕪村

新編 1716
1784 天明3

蕪村日記

狐火の燃えつくばかり 枯尾花

夜の野原にて風に揺らめく枯尾花
怪しく燃え盛るこの世のものならぬ狐火のようた

「鶉衣」横井也
うずらころも よこい やゆう

「幽霊の正体見たり 枯れ尾花」
尾花 || ススキ ↓ 枯れ芒 (かれすすき)

疑心暗鬼の状態
恐怖心や疑いの気持ちがあると、何でもないものまで恐ろしいものに見えることのとえ。
また、恐ろしいと思っていたものも、正体を知ると何でもなくなるということのとえ。
風に揺れるススキを見て、幽霊と見間違う

夜の野原で風に揺れる枯れススキを、この世のものならぬ狐火に譬えて詠んだものである。
穂の出たススキは中秋の名月に収穫物と一緒に供えられるが、これには収穫物を悪霊から守り、翌年の豊作を祈るという意味が込められている。

狐火の燃えつくばかり 枯尾花

与謝蕪村



秋の野に 咲きたる花を
かき数えれば 七種の花

指折り および

紅紫

紅

淡紅

黄

淡紅紫

ききよう

青紫

萩の花

尾花 葛花

尾花 すずき

瞿麦の花

瞿麦 なでしこ

姫部志

姫部志 おみなえし

また 藤袴

朝貌の花

朝貌 おさがお

作者不詳

せりなすな

ごきようはこべら

ほとけのぎ

すずな すずしろ

これぞ春の七草

古代

『延喜式』(餅粥 望粥) 七種粥

米・粟・黍(きび)・稗(ひえ)・
みの・胡麻・小豆の7種の穀物

餅がゆは毎年一月十五日 一般官人には、米に小豆を入れただけの「御粥」
これを食すれば邪気を払える

この風習は『土佐日記』・『枕草子』にも登場する。

『河海抄(かかいしよう)』1362年頃

(四辻善成による『源氏物語』の注釈書)

「芹、なづな、御行、はくべら、仏座、
すずな、すずしろ、これぞ七草」が初見

ただし、歌の作者は不詳



紅葉を
愛でる

京の都

平安時代 藤原道長 十月二十八日

鎌倉時代 藤原定家 十一月七日

江戸時代後期 頼山陽 十一月十一日

昭和戦後 高度成長期 十一月二十日以降

令和二年 紅葉 十二月初めの頃

二〇五〇年は
いかに？

現代の暦の月日に換算

約三百年程度の単位で

紅葉の盛り

紅葉が
錦秋の美が

冬に
なる？



「You Tube」 配信

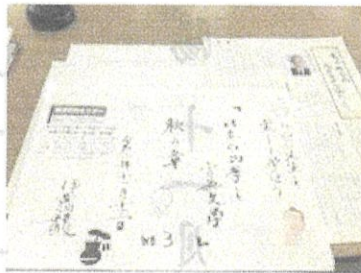
習字講座 お初め

茂原市社会福祉協議会
ウェブサイトから

ガビン先生と楽しく学ぼう!日本の四季と古典文学を開催しました 秋の章
～総合市民センター～

2020年11月13日(金)

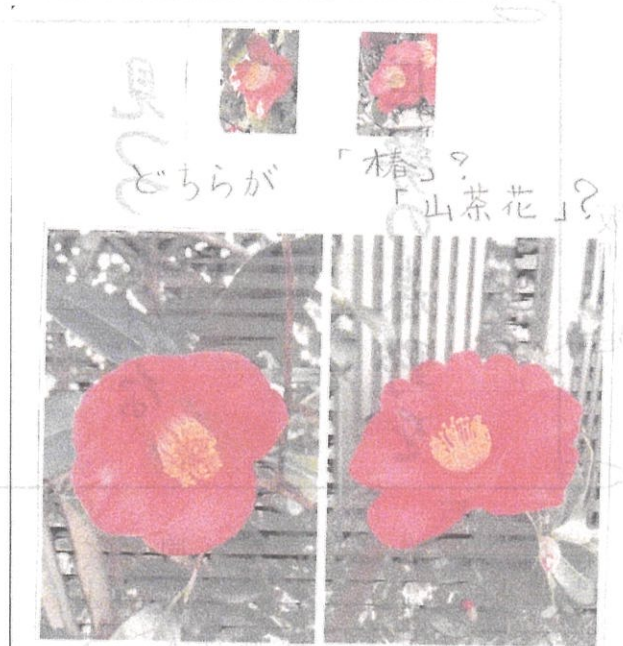
古典文学について、ガビン先生のわかりやすい説明とユーモアたっぷりの表現で楽しく学ぶ事ができました。



「冬の章」

令和二年十二月十一日(金)茂原市総合市民センター

山茶花	椿
10月～12月	12月～4月
毛が生える	無毛
完全に開花	半開き カップ状 完全に 開花しない
↓	↓
花びらが	花首からまるごと
散る	落ちる



椿 国産の木春の木
命の象徴 日本的な用法

四季

冬

二十四節気

立冬

七十二候

(初中末)

初候

つばきはじめてひらく

「山茶始開」

中国では
「水始氷」

西本願寺本 萬葉集 卷一

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸千紀園時歌

大正天皇御宇
撰歌老宗也

伊國

巨勢山乃列々椿都良々々今見乍思奈許涕乃春野乎

右一首坂門人足

朝美青木人々母亦打山行來跡見良武樹人友師母

右一首謝首淡海

或本歌

河上乃列々椿都良々々今難見安可受巨勢能養者

右一首 春曰歲首老

九月十八日 (10/27)
※この歌から年月表記

↓ 十月二十二日

巨勢山の

つらつら椿

つらつらに

見つつ偲はな

巨勢の春野を

坂門人足

つらつら

一面に葉が茂り
連なっている様子

連なっている
たくさんさんの椿

じつと見る

熟視する様

よくよく見ながら

楽しもう

同行の人たちに呼びかけ

今、目の前に無い

偲ぶ(無いものを想像)

心の底から深く思う

椿が満開の

巨勢の春野を

旧巨勢寺

阿吽寺境内

昔から椿が多くある

椿は今
咲いていない
思い浮かべる
想像の世界



奈良県御所市(ごせ)古瀬

持統天皇(祖母)が
文武天皇(孫)と共に
紀伊の白浜温泉へ旅する(行幸)

おそらく治療のため?

河のうへの

つらつら椿

つらつらに

見れども飽かず

巨勢の春野は

かすがのくらびとのおゆ

春日蔵首老

詩人

初雪や水仙の葉 たわむまで

ばせを

芭蕉43歳

貞享3年12月18日

(現在) 1/31

「芭蕉年譜大成」

我が草の戸の

初雪見んと

余所にありても

雲だに曇りければ

急ぎ帰ること

あまたたびなりけるに

師走中の八日

初めて雪降りける よろこび

私の暮らしている庵で

初雪を見ようと

外出していても

空が雪雲で暗くなると

急いで帰宅することが

何度もあった

師走(十二月)中の八日(18)

初めて雪が降った うれしき

待ちに待った初雪が降ってきた

雪の重みに耐えかねて

水仙の葉が

折れ曲がっている



水仙

平安時代に中国から渡来

仙人のように寿命が長く清らか

中国の古典からは

「天仙」・「地仙」・「水仙」

地中海沿岸が原産である

シルクロード?

文学作品には

中世以前に出てこない

水仙 II 「雪中花」 II 「雅客」

しがの山ごえにてよめる

志賀越道を越える際に詠んだ

崇福寺の近傍を経て滋賀里へ出る
(滋賀県大津市)

白雪の

白い雪が

雪Ⅱ冬の華

雪を好意的に見ている
「雪の華」Ⅱ古典的感覚

所もわかず

ところまわず
どこへも分け隔てもなく

降りしけば

降りしきる
絶え間なく降る

地上一面が雪にはならない
降り積もった雪になっていない

いはほ
巖

巖Ⅱ高くそびえる

巖にも咲く

白い花が
岩の上にも咲いている

岩の上にも花が

岩に降り積もった雪を見て
岩の上にも白い花が咲いている

花とこそ見つれ

花かと思えた

花など咲くはずのない



① 講座を終えての感想

現代はとても便利だが、時間に余裕がなく、季節さえ楽しむ気持ちも忘れていた。平安時代より私たちの時代にくる心動きや自然を愛でる感覚を呼び覚まされて、おもしろかった。参加している皆様の古典に対する知識のすごさに感心した。日本には美しい景色、花がたくさんあり、幸せだ。(てぬぐいも美しかった)

和歌にはリズムもあり読みやすく、かつ無駄がなく、また頭文字がかかっている、おしやれ。日本文化は本当に美しいと実感した。

・ 今後折にふれ、古典の世界に触れていきたい。
・ 苦手としていた古典文学の世界に学ぶことができ良かった。

・ とても奥深いものと感じた。
・ 古文とは学生時代に少し学ぶ程度だった。この度の学習で、とても興味を持った。

・ 久しぶりで文学に触れました。遠い昔に戻ることができ、楽しいひとときだった。
・ 四十年ほど前に高校で手背物語の「かきつばた」を暗記したことを思い出した。

・ 大学時代は専門は国文学ではなかったが、高校時代に古文は好きだった。
・ 花の様子も時代とともに変化していることがわかった。

・ わかりやすい講話で楽しかった。
・ わかりやすい講義だった。次回も是非と思う。

・ 楽しかった、わかりやすかった。
・ 毎回楽しく聞かせていただいている。とても楽しかった。

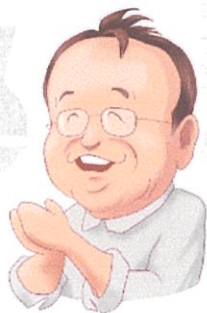
・ とても楽しい授業で学生に帰った様で、わかりやすく楽しく勉強させていただいた。
・ 初めての受講、とても面白く、わかりやすい。

・ 初めて講座を受けさせてもらい、わかりやすく楽しかった。てぬぐいの花も良かった。
・ わかりやすく話していただき、とても楽しかった。

・ 楽しく1時間30分が過ぎてしまった。
・ 久しぶりの講座、学生時代習ったと思うが忘れていた。(笑)

・ 楽しく時間を過ごすことができ、参加して良かった。
・ とてもわかりやすく楽しく、古典が身近に感じられる。すばらしい内容だ。

・ 話の内容がわかりやすく楽しく受けることができた。
・ 肩がこらず、こういう講座が若い時に受けていたら、もっと古典が好きになっただろう。
・ 知識不足で発言することができなかった。これからの生活の中に取り入れていきたい。



- ・ これからの講座に期待する。
- ・ 次回も期待している。
- ・ 次回も楽しみにしている。
- ・ 茂原での古典講座、これからも長く続けてほしい。
- ・ 楽しい講座で毎回楽しみにしている。
- ・ 今後、色々なものを学んでみたい。
- ・ 7月にこれなかったのが残念だった。
- ・ 自分の都合に日程が合うことを祈るばかり。
- ・ 万葉集を自分でも読んでみたい。
- ・ 古典オンの私だが、先生の講座で「目からウロコ」、来年もぜひお願いしたい。
- ・ 先生に教わった生徒は幸せだったと思う。
- ・ 息子が中学時代に国語の時間に使用した先生のお手製の教科書を思い出した。
- ・ 本物を見ることで、改めて文化のすばらしさを実感できた。子どもの頃にそんな体験ができる子は幸せだと思う。

②

△7後、学びたい、古典に関する事

- ・ 古典の後ろにある知識をいろいろ教えてほしい。
- ・ 中学高校で学んだ文学作品をもう一度学んでみたい。
- ・ 花を学んだ。他の食べ物、自然物も知りたい。
- ・ 古典の本が物語にどう取り上げられているのかも知りたい。
- ・ 作品
- ・ 「古事記」
- ・ 「万葉集」 花に関して
- ・ 「伊勢物語」 業平を詳しく知りたい。
- ・ 「枕草子」
- ・ 「更科日記」 千葉県に関わりのある古典について学びたい。
- ・ 「平家物語」 源平の合戦で敗れた平家の公達のうたなど解説していただければ。
- ・ 「新古今和歌集」
- ・ 「梁塵秘抄」 (前回)
- ・ 「歎異抄」を学びたい。
- ・ 「徒然草」
- ・ 「奥の細道」 松尾芭蕉

俳句

以上 令和二年十一月十三日実施



藤野香雅

